学ぶ

キャリアファイル online　俳句作家　by 大学生スタッフ

人と違う自分 17音で表現

わずか17音で全てを表す俳句。挑戦し続ける俳句作家の佐藤文香さん(35)は、古くさい俳句のイメージをものともせず、自らが最先端であるようにかっこよく生きる人だ。人とは違う面白いことを見つけられたら—。自分だけの言葉は、自分らしい生き方の鍵となる。言葉があふれるクリエーティブな人生観に、大学生スタッフがオンラインで迫る。

（文・平野朝陽、構成・杉浦正至）

時代の最先端で詠みたい

佐藤文香さん（35）

柚子の花君に目があり見
開かれ

みずみずしい言葉を自在に操る気鋭の若手俳人。そんなイメージとは裏腹と言うべきか、画面に現れた佐藤さんは〝優しくてイケてるお姉さん〟。親しみやすい笑顔、温かなまなざし。耳元に大ぶりのピアスが輝く。そのポップな姿は強い信念に裏付けられていた。「俳句は古いとか、〝陰キャ〟がやるものと思われがち。自分が最先端でいることで、俳句のイメージを最先端に持ち上げたい」

外見に気を使う。音楽のトレンドを追う。はやりのSNS（会員制交流サイト）は一通りこなす。そんな自己プロデュース術。「俳句はかっこいいものだと信じている」からだ。

俳句に目覚めたのは、松山市で過ごした中学一年。地元テレビ局が企画した特別授業で手ほどきしてくれたのが、俳人の夏井いつきさん。今では全国区の有名人だが、当時は通っていた学校の非常勤講師だった。

がんばるわなんて言うな
よ〇〇〇〇

現代俳句の名作を季語の一覧表を頼りに穴埋めするクイズ。佐藤さんは挙手して「毒茸です」。〝正解〟の「草の花」は外したが、「人と違う面白いことを言う」俳句の魅力に引き込まれた。やがて夏井さん主宰の「FAX句会」に参加するように。全国の高校生による俳句甲子園を制覇して名を挙げ、早稲田大へ。二十代で句集二冊を出し、文筆家として歩みだした。

好きなことを仕事にするには？　スタッフの問いに佐藤さんは「自分がやりたいことと、みんなが求めていることの需要と供給を探ること」と助言。自分が一番になれる分野を探す。分野全体を俯瞰した上で、自分らしさとは何かを把握する。「個性を戦略的に生かす」ことが重要なのだ。

◆

「〝頑張ろう〟と励まされるような言葉よりも、ありがたくない言葉の方が好き」と佐藤さん。例えば「ゴキブリ」という言葉のいかにもゴキブリっぽい響き。「ピロピロピロ」という言葉の何だかよく分からない語感。そんな多面性こそが、言葉の力だという。

俳人の思考回路とは—。取材中、佐藤さんの計らいで即席の句会に。佐藤さんが自作を披露。スタッフが好みの句を選ぶ趣向だ。

Ｗｉ－Ｆｉをかよひ蠟梅
めける声

開花宣言頃のプラネタリ
ウムかな

桜また来るから桜忘れて
いい

一句目を選んだスタッフは「Ｗｉ－Ｆｉ」という言葉はコロナ禍で切っても切り離せないものになった。みんなの心に刺さりやすいと思う」と感想を伝えた。

俳人にならなくても、俳句から学べることがある。「みんなと一緒であることに安心感を覚える人は多い。でも俳句を通じて他人と違うことを言ってやろうという気持ちが残るだけでも、人生の役に立つはず」。佐藤さんのメッセージにスタッフ一同の目が輝いた。

◇

次回は二十日付、小学生記者です。

さとう・あやか　1985年、神戸市生まれ。小学６年で松山市へ転居。中学時代に俳句を始め、松山東高２年時に第５回俳句甲子園で「夕立の一粒源氏物語」が最優秀句に。早稲田大第一文学部卒業。俳人の池田澄子に師事。2006年、芝不器男俳句新人賞対馬康子奨励賞。句集は「海藻標本」（宗左近俳句大賞）、「君に目があり見開かれ」。恋愛小説の執筆や漫画の俳句協力、句集のプロデュースも手掛ける。作詞に、下村陽子×suis fromヨルシカ「＃時をめくる指」。

ビデオ会議システムで取材に参加する大学生スタッフ

取材レポート

大津桃花（愛知教育大２年）　見ることもできるし、聞くこともできる。写真や映像にはない言葉の魅力を知ったことがとても印象的だった。自分の学ぶ機会は自分自身で発掘し、その最先端にいるからこそ言葉の未知の可能性を見いだしていけるのだと心から実感した。

大橋咲奈（愛知教育大２年）　「俳句はカッコイイ」と信じ、自らの道を切り開いていった心の強さ。佐藤さんの言葉からは、みなぎるエネルギーを感じた。これからの人生、私がどんな道を歩んでも、その時の自分を信じて、一生懸命前を向いて生きていきたい。

平野朝陽（上智大４年）　俳句はもっと自由にできると感じた。私は、古めかしい俳句のイメージにとらわれていたのかもしれない。自らの新たな意識によって概念を覆すアクションが起こせる。俳句を愛する者として、これからの可能性を自身の意識とともに広げていきたい。

吉田光里（金城学院大３年）　「私が俳句のイメージを変えてみせる」。オンリーワンを極めた佐藤さんに感銘を受けた。集団が生む安心感に違和感を覚え、人々の価値観を広げた彼女を目指して。凝り固まった常識を疑い、社会の当たり前をアップデートする存在になりたい。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています